12 月のおはなし

「サンタが街にやってくる」

1

浅岡はある場末の歓楽街の一角に、ショットバーを開いた。家賃はただ同然だったが、客もほとんど来なかった。

彼は敬虔にも、毎日神に祈っていた。自分の技量を発揮できる客が来ることを。しかし、たまに来る客が頼む物は決って水割りとビールだった。もともと日本人の多くはウイスキーやカクテルを本当の意味で解さないし、ましてやここは場末の店だった。しかし浅岡はいいものを出していれば、客はやってくるという信念に固執していた。それは真理というより希望に過ぎなかった。ただ人間はより絶望的な状況になるにつれて、わずかな希望にしがみつくもので、彼はその見本のようなものだった。彼は来る日も来る日も失望し、やがて、その目は陸にあがった魚のように淀んでいった。

2

三年がたったある冬の夜、焼酎がないことに腹をたてた客が帰った後、浅岡はとうとう、「ここでの商売を諦めよう」と決意した。それは繰り返し間接的に示されていた神の御心であり、ようやくそれが彼に届いたのだ。しかし、皮肉なことに、ここで彼は初めて神の存在を疑った。俺のこれまでの祈りはなんだったのか、なにひとつ応えなかった神にこれからも祈りを捧げるべきなのか。

そのとき、扉が開く音がした。断るかどうか思案しながら扉の方に向き直った。

そこにはサンタクロースのフェイスマスクをかぶった男が立っていた。

「かねをだせ」

男は痩せぎすのちびで、右手

3

に銃を持っていた。銃口はぷるぷると震えていた。浅岡の疲労は増した。

「サンタさん。もう看板だ、明日にしてくれ」

男は気色ばんだ。

「な、なめるな」

「なめてるのはどっちだ！」

浅岡は突然激昂して叫んだ。窓硝子がびりびり震えるほどの大声だった。

「す、すいません」

男は気圧されて思わず謝った。

「お前にくれてやる金があれば、今日で店をたたんだりしない」

「え？」

「お前が最後の客ってわけだ。ま、金を払うわけじゃなさそうだが」

男はそれを聞いて律儀に頭を下げた。

「そんなこととは露知らず大変

失礼しました。こんな時間にお邪魔しましたのは一日の売り上げが溜まっているかと考えてのことで、他意はございません」

他意ってなんだ、浅岡は思った。

「だいたいこんな場末のバーに金があると思うほうがおかしい。金が欲しいなら銀行に行け」

「はい。ただ、流行っていない方が警戒も緩いかと思いまして。何分初心者なものですから」

浅岡はあきれた。

「お粗末な教条主義だな。お前の小さな頭で考えたとおりに世の中動くわけが」

4

浅岡は、はた、と何かに気が付いて口をつぐんだ。そして自嘲ぎみに笑うと、礼儀正しい強盗に向き直った。

「まあ座れ」

「は？」

「金はないが酒はある。ここは

酒を飲むところだ。一杯おごろう」

男は半分納得できないような反応で、でも、カウンターに着いて、銃をおいた。

「じゃあダイキリを」

浅岡は声をださず、ほう、と息を吐いた。

ダイキリ。

シンプルが故に奥深く、バーテンダーの技量が試される。

「いいだろう」

浅岡の目に生気が戻った。

神はクリスマスの夜、愚かしき人間達にも祝福を与えたもう。■

5

妄想の地平線

12月のおはなし

文　ハヤシアキオ　　絵　凹工房

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

ⓒ HAYASI AKIO & BOKOKOUBOU